



Be fearless ~伝統と共に煌めく未来へ~

猛暑の中、命の限り鳴く蝉(セミ)に寄せて

夏の初め、あまりの暑さか蝉が鳴かない、声が聞こえないということが言われました。しかし現在は、耳うるさいほどに蝉が鳴いています。その声に、暑さが倍増する感じさえします。

セミを初めとした昆虫は、幼虫やさなぎから成虫へ変化するとき、殻を破いて脱ぐ脱皮、羽化を行います。

人間の中学生、高校生の時代は、昆虫で言えば子どもから大人へ羽化・変化する時期にあたると思います。人間は、昆虫のようにその姿が成長により全く異なることにはなりません、大きくなるとともに、がっしりしたりふくよかになったりします。同時に、内面的には自分とは一体何者なのかといった自意識が高まり、他者との違いに敏感になり、優劣、美醜などに過剰になりがちで、時に深く悩んだりします。そして、自分はこうした人間なんだという自我が徐々に確立してきます。

その際大事なことは、「**蝉脱（せんだつ）**」という言葉にあります。いくつか意味がありますが、その中の一つに「**現実から抜け出し、理想の自分になる。**」というような意味があります。ぜひ新しい自分、世のため人のために頑張れる立派な自分をめざしていけるといいですね。

さらに、皆さん知っての通り、セミは成虫になって地上で過ごす期間はわずか1週間から数週間です。まるで短い命を精一杯生ききるように一心不乱に鳴いています。その聲に、一生懸命を超えた真剣さ、真摯さを感じます。誰のためでもなく、与えられた命に感謝し自分の使命を、生命を全う、完全燃焼しているようで感動です。

下に松尾芭蕉のセミに関する句を紹介します。静けさと生命力、直向きさを感じます。

閑さや岩にしみ入る蝉の声

やがて死ぬけしきは見えず蝉の声

右の写真はセミの幼虫と山口で見かけるセミです。

夏の進行によって、鳴く蝉が変わり、その声に季節の移ろいが感じられます。



ニイニイゼミ

アブラゼミ

クマゼミ

ツクツクボウシ

天網恢々（てんもうかいかい）疎（そ）にして漏らさず

天、神、何か偉大な存在が地に張り巡らした網は、編み目が大きくゆったりしていて粗いようであるが、決して漏らすことはなく、それに搦め捕られる。

すなわち、悪い事を行えば、一時的には逃げおおせるなどうまくいったように見えるけれど、結局は、露見してしまい、その報いを受けるところになるの意味です。

「正直の頭に神宿る」という言葉もあります。

何か悪いことをしてしまい、嘘をついてその場をしのげても、その事実は消えません。その嘘や偽りによって、誰かを傷つけたりあるいは、迷惑を掛けたりしたとき、素直に自分の非を認め正直に謝ることは、日常生活を送る上で大変重要です。一緒に生活する仲間に対してであればなおさらです。

一つの小さな嘘は、バスタブに張ったお湯に、インク一滴落とすようなもので、かき混ぜれば何も無かったようになります。その行為の事実を知らない人からは、全く分かりません。

しかし、それをしたことは自分の意識の中に留まり消えることはありません。そのことが重なれば、心が汚れていきます。

良心（神）という心の神を育てていきましょう。

心を育み、脳を活性化する読書

戦争を起こす国はどこも自国の正義を掲げて戦争へと進みますが、その戦争により不条理に多くの命が失われることを考えれば、いかなる戦争にも正当性はないと思います。戦後80年を迎え、平和のありがたさとともに、戦争は絶対に起こしてはいけないことを強く意識すべきだと思います。



『さがしています』 アーサー・ビナード 著 童心社

広島への原爆投下によって、一瞬のうちに体を亡くした人々の遺品等について、身に付けていた、あるいはそこに存在していた人を思って書かれた絵本です。一瞬にして消えた命のはかなさ、原爆のむごさをわかりやすい、淡々とした表現の中に、見事に表現されています。亡くなられた人に対する、想像を掻き立てられますし、むごさを痛切に感じます。



『知らなかった僕らの戦争』 アーサー・ビナード 著 小学館

実際に戦争に何らかの形で関わった人に直接インタビューした内容が、インタビューした人ごとに記述されています。小説とは異なり、生の感情や思いが言葉に現れていて、戦争のむごさを強く感じます。小説とは異なった、当然ですがリアルな、身近な感じがして戦争は絶対にいけないと思いました。また、自分が知っている事実の解釈の違いにも驚きました。